

瀬戸の魅力再発見 まちめぐり Part 2

瀬戸市交流活力部文化課

平成28年1月17日(日)

宝泉寺→窯垣の小径資料館→王子窯モロ→洞・窯跡の杜→洞・本業窯

1 宝泉寺(寺本町)

瀬戸の中心市街地、尾張瀬戸駅から国道248号線を約1km東に行くと、瀬戸川を南から見下ろすように宝泉寺の多宝塔が見えてきます。宝泉寺は今から約760年前の建長四年(1252)に霊水山神宮寺として創建されましたが、その後300年の来歴は不明で、

慶長元年(1596)には火災により焼失したとされています。その後、正保四年(1648)に、赤津の雲興寺15世興南和尚により、当地に曹洞宗の禅刹大唱山宝泉寺が開かれました。本堂には本尊釈迦無尼如来、観音堂の1階には千手千眼観音菩薩像が祀っており、そ



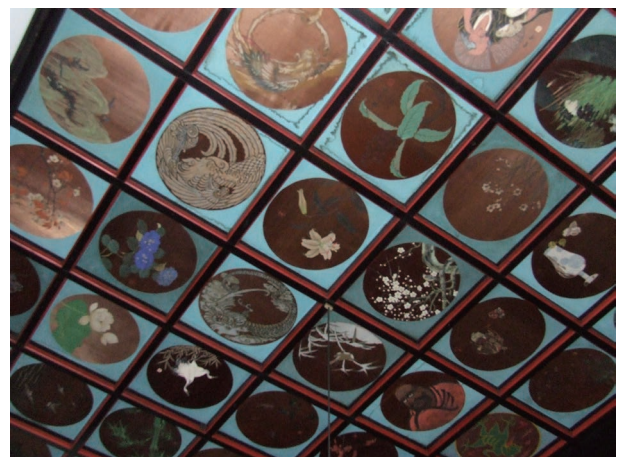
宝泉寺 山門



陶製十六羅漢塑像



宝泉寺 本堂



本堂 天井絵

の2階は修行僧達の修行の場である座禅堂になっています。山門は全国的にも珍しい上下2層構造の竜宮作りとなっていて、階上部分は鐘楼になっています。この他、本堂の

陶製十六羅漢像は市の文化財に指定されており、天井にはかつて絵付職人が書いたとされる天井絵は非常に見ごたえがあります。

2 窯垣の小径・窯垣の小径資料館（仲洞町）

①窯垣の小径

宝泉寺を出て東に向かう細い路地には、かつてこの洞でやきものの生産に使われた「ツク」・「エブタ」・「エンゴロ」といった窯道具を埋め込んだ塀がみられます。全長400mほどのこの細い道を窯垣の小径と呼びますが、かつてはこの道が窯業生産で栄えた洞のメインストリートであり、窯場で働く人たちが、陶磁器や燃料を運ぶために横行した汗の道でもありました。

窯垣が確認できる最も古い資料は、幕末～明治に刊行された「尾張名所図会」に掲載されている「瀬戸陶器職場」の図ですが、窯垣が作られ始めた年代について詳しいことは分

かっていません。ただ、窯道具が大量に不要になったのは約100年前（明治末～大正）の登窯から石炭窯への転換期と戦時中の企業整備による窯屋の大量の転廃業、そして昭和20年代～昭和40年代にかけての登窯の終焉期で、それを契機に窯垣が多く築かれ、今の姿になったと考えられます。

②窯垣の小径資料館

窯垣の小径を東へ抜ける途中に、かつて洞で陶磁器生産を行った窯元、寺田家の民家が見えてきます。ここは平成7年に改修され、現在、窯垣の小径資料館として利用されています。



窯垣の小径



窯垣の小径資料館

敷地内の構成は、母屋、倉庫、離れ（客間用）の3点セットになっており、窯垣の小径沿いの旧家のひとつの典型となっています。母屋は明治2年には建てられていたことが確認されており、その後倉庫が、さらに大正時代に離れを追加して建てています。

母屋は四八畳のつくりでしたが、現在は二八畳に改修されています。入口を入ってす



本業タイルが敷き詰められた浴室

ぐ右の、作品が展示してある部屋は元々馬小屋や使用人の寝間で、さらに土間の奥は勝手場として使われていました。この他、浴室やトイレは日本の近代タイル第一号であり、洞の特産品の一つでもあった本業タイルが敷き詰めてあり、この地区の特徴を窺うことができます。

3 王子窯モロ（東洞町）

現在使用されている王子窯の工房（モロ）は、明治33年に建築されたもので、木造2階建て、間口10間、奥行3間と規模としては若干大きめのものです。内部には柱がなく、天井までの高さもあまり高くない典型的なモロの造りとなっています。

東側の通りから入口に向かうと、左手に窯場があり、現在は使われていませんが非常に

規模の大きい重油窯の姿を今も見ることができます。また、近代において洞のみならず瀬戸の風景を特徴づけた重油窯の煙突が今も残されており、かつて窯業生産で活況を呈した当時の姿を偲ぶことができます。

現在駐車場となっている場所は、荷卸し場として使用されていました。その西側には原土置き場があり、設置されたクラッシャーで



王子窯（加藤利道氏工場）モロ外部



重油窯

土を砕き、コンベアで西側の部屋にある攪拌タンクに送られます。このように、東側から搬入された原土は、基本的にモロの西側へと各工程を経て送られ、成形・施釉され製品へと変わっていきます（播鉢用と工芸品用の土は若干工程が異なります）。

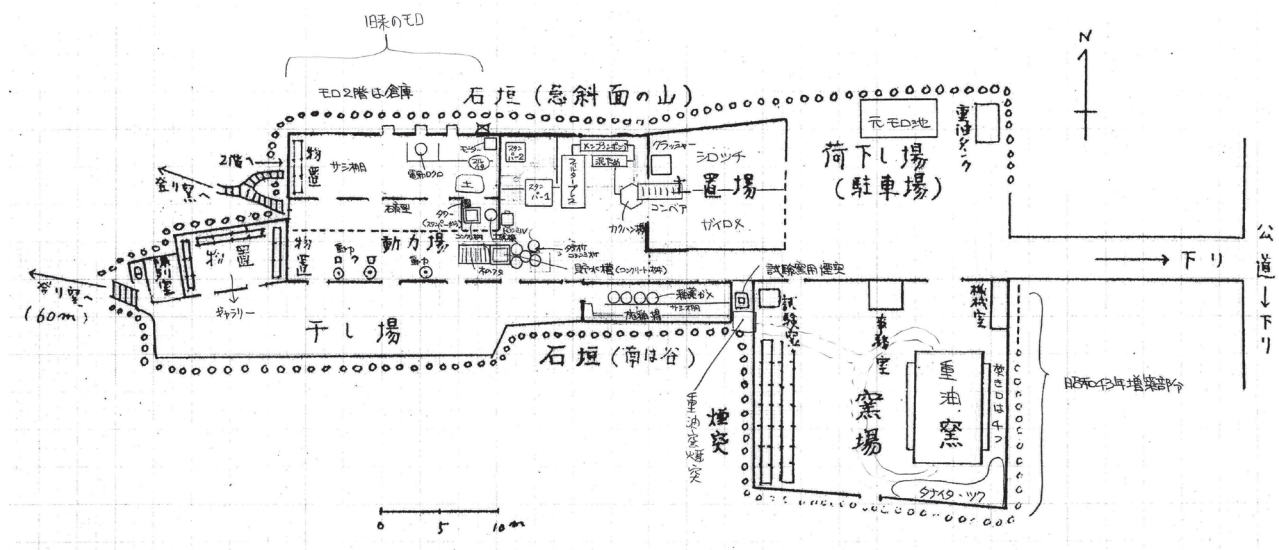


重油窯煙突

かつて、王子窯モロの西側には、王子窯本体である連房式登窯が北側斜面に構築されていました。現在は残念ながらその姿を見ることはできませんが、かつて、このモロで成形され、乾燥させた製品は、王子窯へと続く細く、傾斜の急な道を通して窯の中に入れられ焼かれていました。その道は現在でも残されていますが、そこを歩くことによって、その昔、細長いサシ棚に製品をたくさん乗せ、それを窯へと運んだ職人の苦勞と技を窺い知ることができます。



王子窯モロ内部（サシ棚付近）



王子窯モロ平面図



王子窯モロと王子窯跡

4 洞・窯跡の杜（東洞町）

王子窯の東側、窯垣の小径を東に抜けると、かつて陶磁器を生産した登窯が存在した森に突き当たります。この森が平成 25 年に山開きされた「窯跡の杜」です。平成 24 年に確認調査を行った結果、窯体の位置や遺存状況が確認され、また、平成 26 年には窯体の周りにかつて存在したモロの 1 つが調査され、操業当時の様子が明らかにされました。

窯跡は「洞窯跡」と「東洞 A 窯跡」の大きく 2 つに分けられます。洞窯跡では連房式登窯の床面が比較的良好に残存していることが明らかにできました。確認された窯体の規模は、推定で全長 25m、最大幅は 6m 以上になり、製品を焼くための焼成室は 12 ～ 13 房になると思われます。さらに、洞窯跡の窯体を確認された斜面の西側の調査区では（下図「崖断面」）、別の窯体の断面が確認さ

れたことから、窯体が何度も改築されたと考えられます。また、窯体の西側の調査（18T・19T）では、本窯で生産された製品が大量に出土しており、この付近が焼成に失敗した製品を投棄した、いわゆる「物原^{ものはら}」であったと思われます。物原から出土した遺物は基本的に陶器で、古いもので 18 世紀中頃のものがみられたことから、少なくともその年代には本窯の操業が開始されたと考えられます。こ



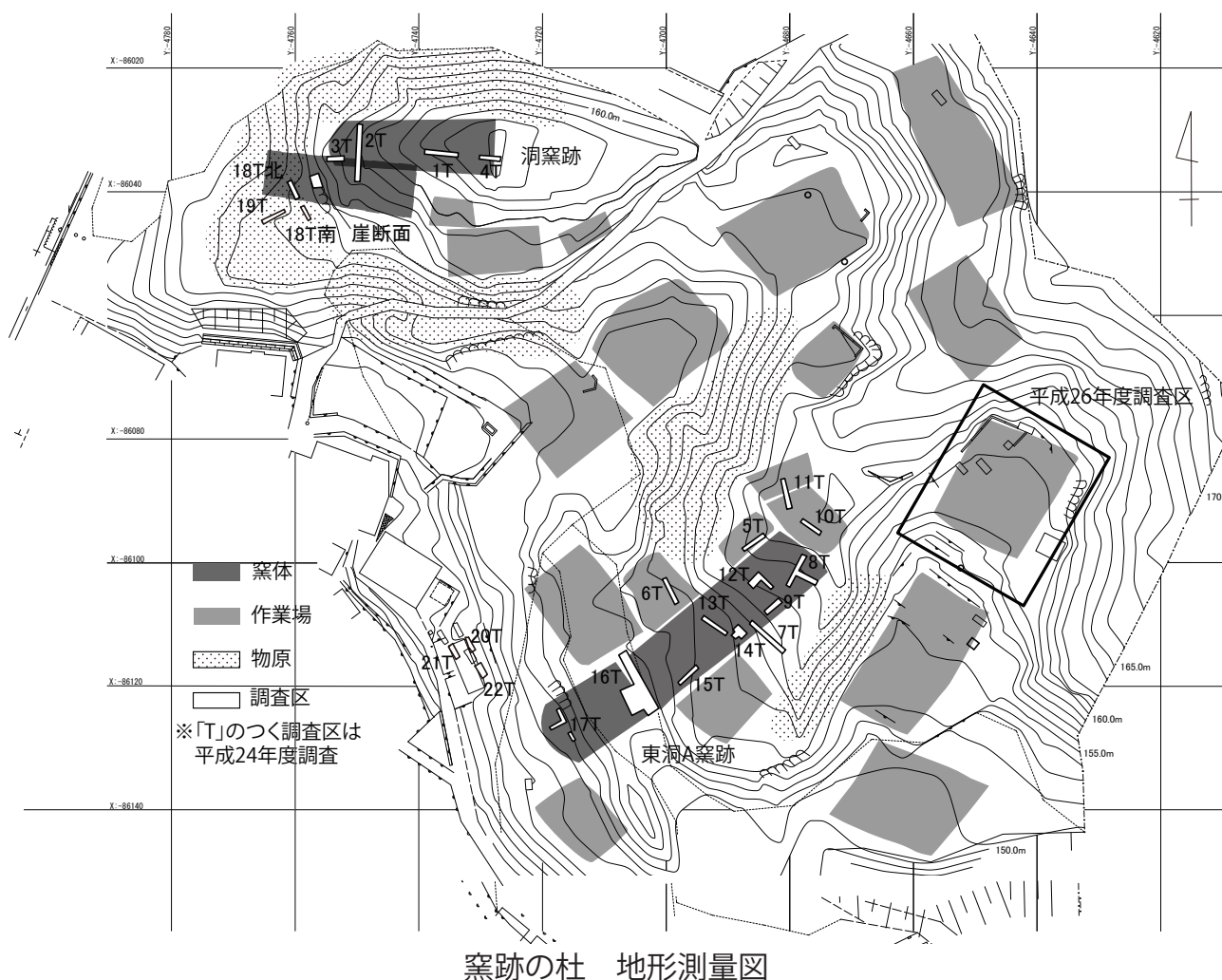
洞・窯跡の杜入口

れに対して、本窯の最終焼成品で窯体内から出土した遺物は19世紀後葉の幕末のものと考えられる磁器の碗皿類で、本窯での生産が100年近く行われたことが窺えます。

東洞A窯跡は、1935年発行の『登窯二關スル調査報告書』には「洞奥窯」として記載されており、それによると窯体は陶器を生産した本業窯で、13房の焼成室からなる長大な窯であったとされています。調査では残念ながら焚口部分の基礎を確認できたにすぎませんが、周辺の調査によって出土した遺物や地元の方のご教示から、本窯が江戸時代末期から操業が開始され、戦後の昭和20年代まで操業が続けられたことがわかっています。なお、使用された窯体は、現在洞と一里塚の本業窯の2つに分けて移築されて当

時の姿を窺うことができます。また、東洞A窯跡があった窯体のさらに南西下方（17T付近）では別の窯体が良好に残存していることがわかりました。全体の規模や操業年代は不明ですが、近接した場所に窯が密集して作られていたとも考えられます。

洞と東洞A窯跡、この2つの窯跡は複数の窯屋によって操業されていましたが、それぞれの窯屋が使っていたであろう（モロ）は、今もなお周辺に残る平坦な地形にあったと考えられます。そのうちの1つの調査では、近世・近代に使われたであろうモロの状況が明らかにされました。モロを構成するのは煉瓦造りのプーリー（モーター動力をモロ内に伝える滑車）台と、それと連動したであろうスタンパー（陶土を粉碎する装置）や土練機





洞窯跡 窯体の一部



東洞 A 窯跡 焚口部分の基礎



洞窯跡 崖部分で確認された別の窯体



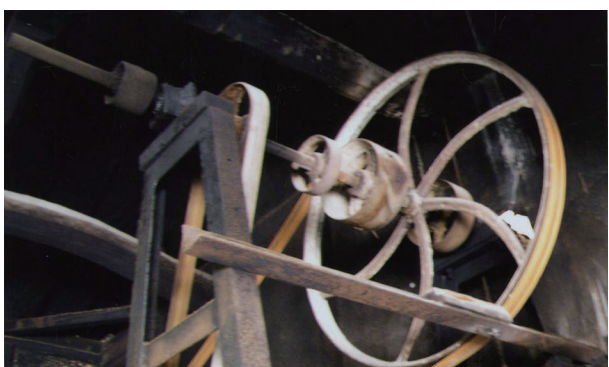
東洞 A 窯跡 南西側の別の窯体



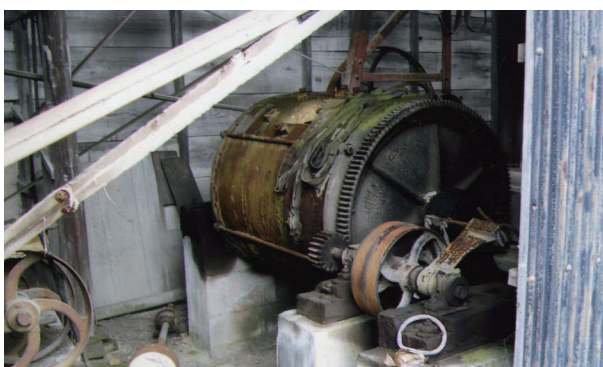
モロ 調査区全景



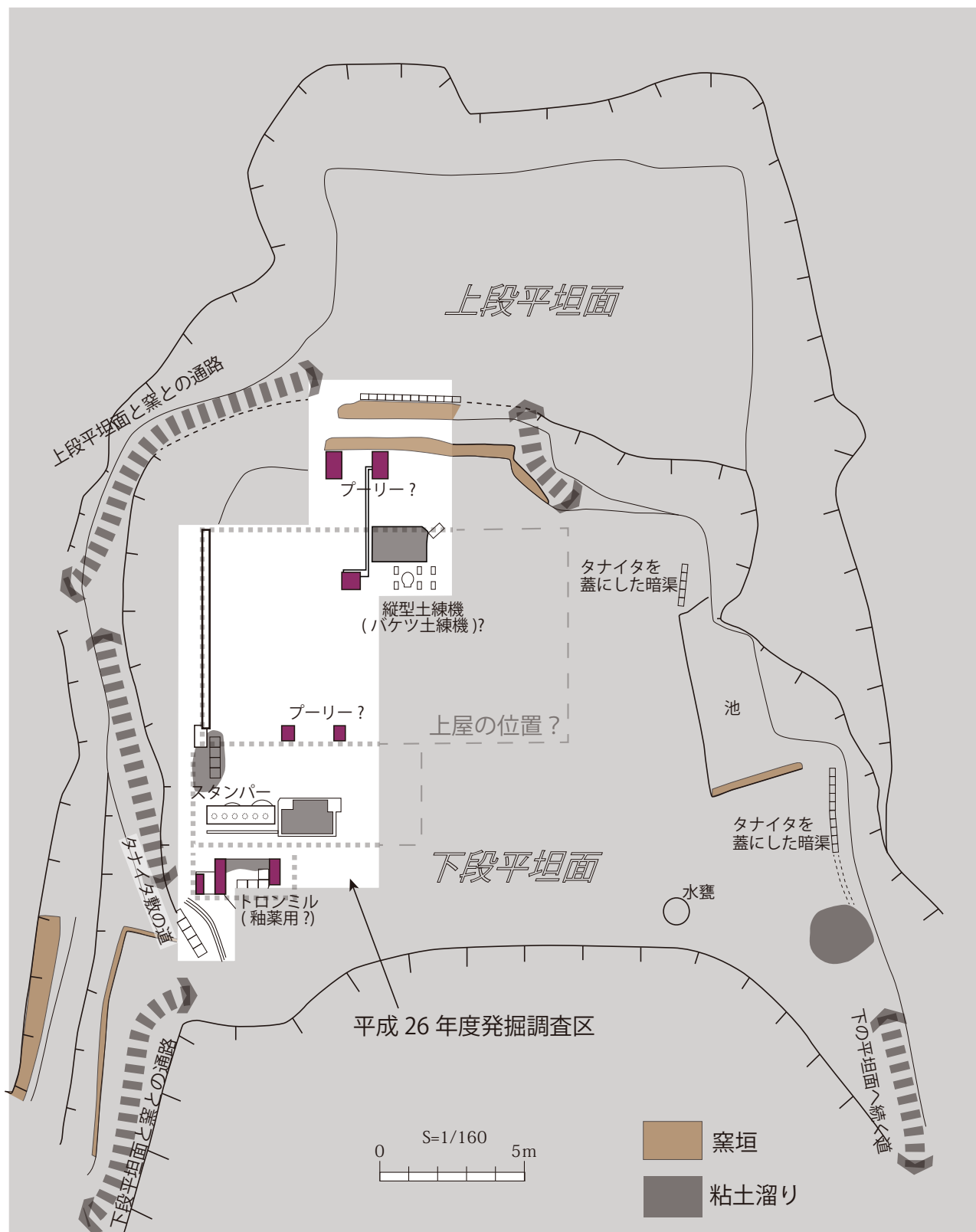
スタンパー



プーリー



トロンミル



東洞 A(奥洞)窯跡(工場跡)の 平成 26 年度発掘調査
地形測量図と遺構見取図(上方方向が北)



土練機（バケツ型）

（粘土を練り合わせる機械）とみられる基礎部分の他、釉薬を調合するためのトロンミルの基部や陶土を溜めておくためのコンクリート槽などで、操業当時の姿を今もなお偲ぶことができます。

洞地区は、近世後期から近代にかけて活況を呈した瀬戸村（瀬戸町）の中でも特に窯業生産が盛んに行われた地区で、この「洞・窯跡の杜」は、その当時の姿を知ることができる数少ない近世・近代窯業遺跡の集合体といえます。元々洞地区は、江戸時代後期以降、周囲の地区が磁器生産優位へと転換していく中、陶器生産が主流であった地区ですが、明治期になると磁器生産に転換する窯屋が急増することが知られています。その中で、明治期の様子を伝える「加藤誠一磁器工場」には、当時もまだ陶器生産を行っていたであろう東洞 A 窯が写し出されています。洞の街を悠然と見下ろす長大な窯の覆い屋は、かつて磁器生産で活況を呈した洞の街の象徴であったことが窺えます。



加藤誠一磁器工場（○印が東洞 A 窯跡）

5 洞・本業窯（東洞町）

窯跡の杜の南側斜面を降りると、かつて東洞 A 窯跡で操業した連房式登窯を部分的に移築して構築された、「洞・本業窯」に辿りつきます。昭和 24 年に今の場所に移築され、その時にモロや倉庫も一緒に再構築されました。現在の瀬戸でこのように登窯の窯体が残されている例はほとんどなく、極めて貴重な資料であるため、市の指定建造物となっています。

窯の規模は全長 14m、最大幅は 7m で、3 口の焚口と胴木間（焼成室）・捨間、そして製品を焼成するための 4 つの焼成室と煙道（コクド）からなります。この窯で製品を焼成するのにかかる日数は 7 日間といわれており（前身の東洞 A 窯では焼成に 200 時間、

冷却に 240 時間かかっていた）、昭和 54 年までは実際にこの窯で生産が行われていました。その当時の主力製品は水甕やこね鉢で、年に数回焼成をしていました。

ここで窯を営む水野半次郎家は江戸時代から続く窯屋で、当代で 7 代目になります。現在も昔ながらの瀬戸の本業焼の製法にこだわり、成形はロクロ水挽きを中心とし、絵付は麦わら手や陶胎染付などの伝統的な文様を手がけ、釉薬の原料の木灰は自家精製するなど、その調合などにもこだわっています。また、併設されたギャラリーでは作品が展示され、購入することができます。



洞・本業窯